野良人（のらじん）
花くまゆうさく
SIPIN
7

普通、捨て子といえば
親はお早

親切な人や

変質者にひろわれるか
お前がくろまくかっ
ハァ
ハァ

犬に食われてしまうが
もぐ
もぐ

誰にもひろわれず
そのまま自然に
育ってしまうのが
たまにいる
スクスク

それが
トコ
トコ

野良人だっ!!
おろ——
アッ

野良人だ
あわわ
シーッ

逃げろっ
逃げても
ムダだ
野良人は足がとても速い
ぬう
ダッ
ダッ
ダッ
ダッ

生活がかかってるのだ
遊びじゃないんだ!
うー
もぐ
もぐ
おみやげの
ケーキが
オロオロ

そして
食欲を
満たすと
………
全部
食べちゃ
うの……
ちゅぱ
ちゅぱ
オロオロ

クルッ
シピン
つぎは
!?
ビクッ

性欲だ
ひいい
グ

とくに年頃の
野良人の場合
男と女、見境
なく襲う
いたいよ
いたいよ
ケーキとら
れたうえ
カラダまで…
ううう
ハァ
ハァ
ハァ
バス
バス

だが所かまわずするので町の匂いが変わってしまった

くさーい

その姿は、今、日本の池でおとなしいクサガメや石ガメを追い出し増殖しているミドリガメのようだ

しかし、今夜のエモノはいつものようにはいかなかった。彼女は陸上部キャプテンの岩本朋子さんだったのだ
ハッ
ハッ
ダッ
ハッ
ダッ
ダッ

むーす
キャ

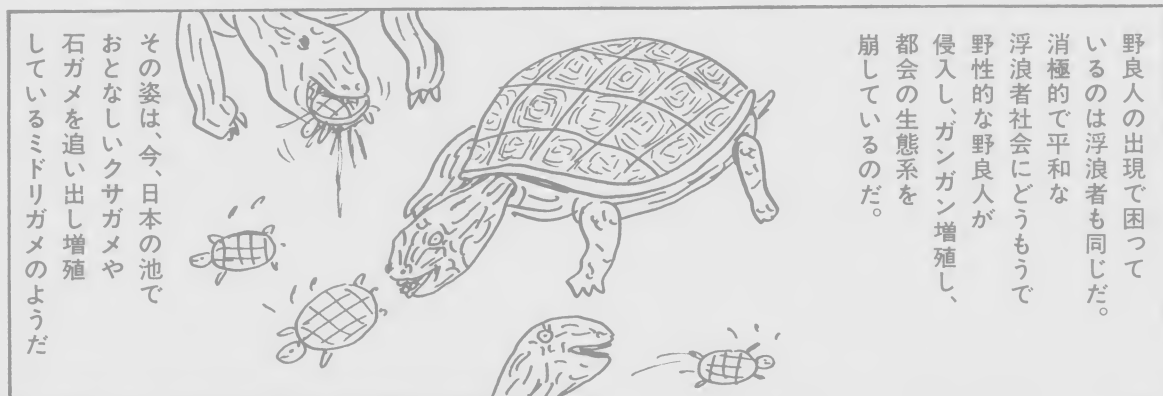
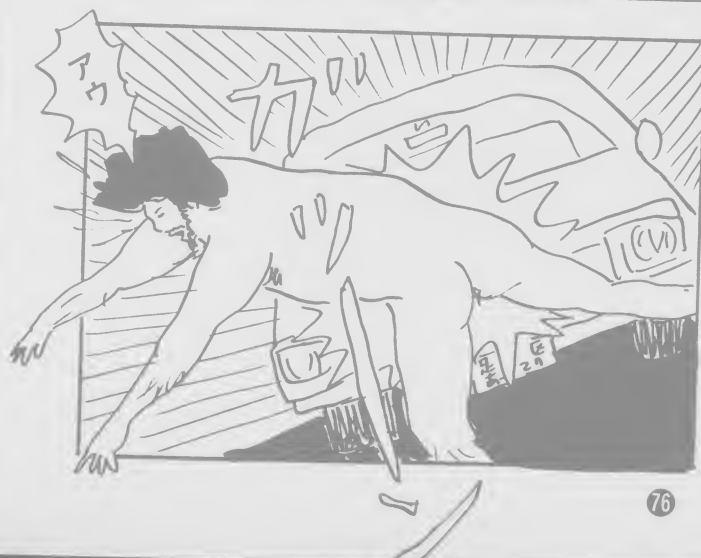
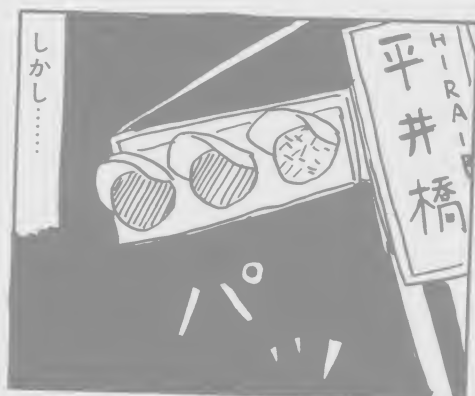
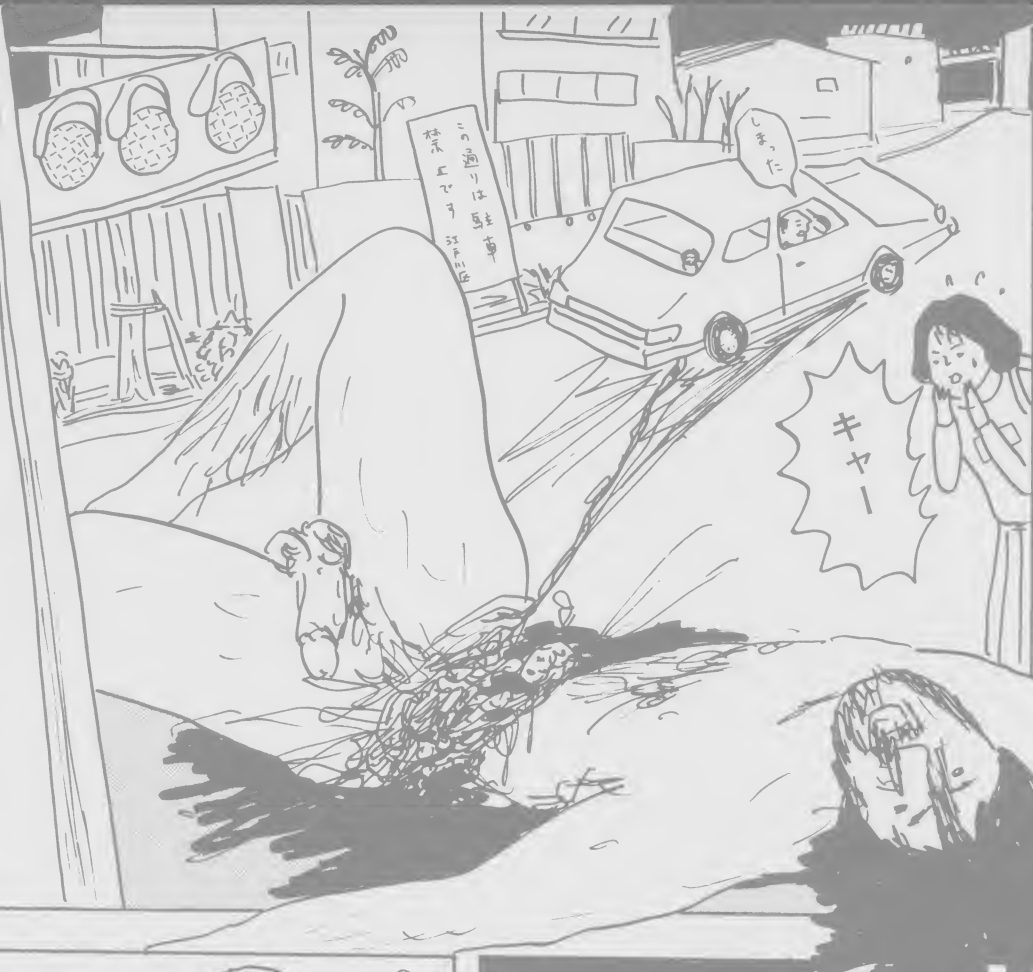
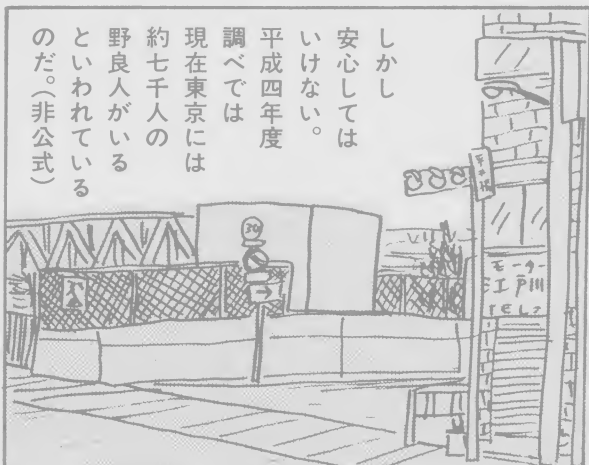
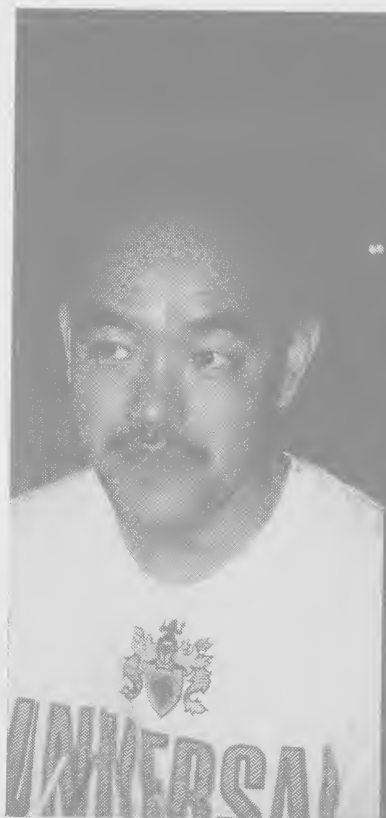
しかし……
平井橋
HIRAI
パッ

けど野良人だって
生活がかかってるのだ！必死に食らいついた！
ばどー

……
プ

プ

アウ
カル

プ
!?

この通りは駐車禁止です 江戸川区
しまった
キャー
野良人にとって信号は三色の実がなる木でしかなかったのか……
よかった野良人だ
あっけなくいってしまった野良人のために彼女は笛で〝野良人のバラード〟（オリジナル）を吹いてあげた
しかし安心してはいけない。平成四年度調べでは現在東京には約七千人の野良人がいるといわれているのだ。（非公式）
おしまい

# 入選作の頃　平口広美

マンガ家になりたいという気持ちは、18才で北海道から上京した当時から持ってはいたのですが、生来の優柔不断。かって死にもの狂いで徹夜して原稿を描きため、投稿したり雑誌社を回ったり好きなマンガ家の門を叩くというような積極的な行動をとることもなく、ただ漠然と、いつかマンガ家になれればいいなあ、くらいに思いバイトに明け暮れておりました。

ただ『赤瀬川原平』と『ガロ』の二つだけは常に頭のどこかに引っかかっており気になる存在でした。美学校で赤瀬川さんの工房が開かれるというのも知ってはいましたが入学金が高かった。

数年後、相変わらずのバイト暮しでしたが、長く続けていると色んな所を転々とするよりも一カ所に腰を落ちつけるほうが楽になってきて、キャバレーの調理場を生まれて初めて正社員として二年やりました。するとそこそこお金は溜ります。お金は溜りましたが、レジャー産業、サービス業の悲しさ、不景気のあおりをモロに受け突然の人員整理。依願退職。

そこそこのお金を片手に珍しく決断しました。「美学校に行こう!」と。26才の時です。絵・文字工房に入学して生の赤瀬川さんに会えた感激!独特の教材を用いての様々な実技。スライドを見ながらの夜の酒宴、いや講義。そして夏及び冬休みの宿題。まさに目からウロコが落ちる、実に新鮮で気持ちのよい至上の時でした。あっという間の一年。一年で修了のはずの工房に、あまりの気持ちのよさに春となり新入生を迎えても〝研究生〟としてズルズル残り、けっきょく丸2年居着いてしまいました。

こうして2年間も居着いた以上は何かやはり形を残さなくてはならない。そこでまた決断しました。「ガロに描く!」。

美学校から青林堂は歩いても数分の距離の所にあります。しかも南伸坊やナベゾ(渡辺和博)が編集者として腕をふるっていた時代で、絵・文字工房にもよく遊びに来ており面識はありました。さっそく描き上げ、あの伝説の木村店2階への長い階段を登りました。驚いたのはドアに貼られた紙です。「ノックは無用。御用の方はどんどん中へ」

言いまわしは少し違うかも知れませんが、こういう意味のことが書かれた紙がペタリと貼られておりました。これは描き上げた原稿を持ってあの長い階段を登りつめた身には、なんとも言えぬオアシスに見えました。美学校の授業の空気と同じ、「自由」という言葉がすぐに思い浮かびました。

ここからさらに記憶が曖昧になるのですが、2回落選して3度目の作品「電車を待っていた」で入選となる、と自分では思っていたのですが、落選した作品のうち一本は題名も内容も覚えていますが、もう一本の方がどうしても思い出せません。すると、2本目で入選だったのかな。いずれにしろ落選作については自分でもしょうがないと思っております。

ただ『電車を待っていた』の時だけは、「落としたほうが悪い!」と、頭の中で何度も繰り返し長い階段をゆっくり登っていったのを覚えております。

入選作品「電車を待っていた」('78年6月号)